日本山岳会々報

昭和21年4月 | 133 | 創刊昭和5年

山岳文化の再建

我が國は八年間にわたる對外戰爭で、國力の大半を消耗し盡し完全に敗れた。全國の大中都市は空襲の被害を受けて潰滅してしまつた。一切の軍備は解体された。今は占領の聯合軍のもとに半ば獨立を失つた形で統治されてゐるのである。敗戰と凶作との爲に國民生活は窮迫し、果して飢餓を切り拔けてゆけるかどうか甚だ憂ふべき狀態にある。爲に道義は廢れ、思想は混亂して、未だ落付くところを知らない有樣で、戰爭に負ければかくも悲慘なことになるものかと、今更年らつく〳〵思はずに居られない。

かうした狀態の下にあつて、このやうな慘膽たる結末に終らればならぬやうな無謀な戰爭が何故起つたのか、又世界の强大國を相手に戰ふのに、如何に我が國の組織が脆弱なものであつたかといふやうな點について、大体我々は知る事を得たのである。原因が判り、結果が明らかとなつては、再びそのやうな過誤を犯さないやうな確固とした國家を作る爲に、國民の全部が立ち上らればならぬ事は自明の理である。占領軍の監視下に我が國は今民主的平和國家として文化國家として再建のスタートに就かうとしつゝあるのである。この目的を達する爲には、現在のやうに國民の大多數が無氣力であつてはならないのであつて、前途に光明を與へて一日も早く氣力を恢復するやうにせればならないと思ふ。その爲には先づ食を與へればならない。次いで趣味や文化を與へればならないのである。

この爲には各文化機關は總勢を整へて立ち上り、各々の文化の普及指導に精進せればならない。我が山岳界亦其の例外であつてはならないと思ふ。

凡そ一國に於ける山岳文化の發達普及の如何は、その國の盛衰に相當の關係ある事は歴史の證する所であつて、老衰國や弱國殖民地といつたやうなところの國民に登山や探險の氣風の旺盛な所は餘りないのである。我が國では近時國民の間にそれ等の氣風が次第に勃興しつゝあつて甚だ賴もしく思はれたのであつたが、國民を盲目とした秘密政治によつて無謀な戰爭を起した軍閥等の爲に、一擧にして東洋の一小國に顚落してしまつたのである。併し我が國民は、本來決して所謂弱小國民ではない筈であるから、氣力を恢復する事によつて、再び立ち上り得ると信ぜられるのである。そして再び立ち上つた我が國は、國土は小さく共、國力の充實した文化の發達した國として、世界の各國と幸福を共にして行く事が出來るものと思ふ。その出發に當つて、我等は先づ岳界を再建しなければならない。

其處で此戰爭中我が山岳界がどのやうに推移して行つたかについて考察して見たい。我が國の登山は大正の中頃から支那事變の中途迄次第に隆盛になつて一般大衆迄普及した。それにつれて山岳文化も大體健全な發達を示し、我が岳界の最高目標はヒマラヤの未踏峰に置かれるに到り、その準備も進められてゐた。ところが戰爭の長期化と共に漸く登山の實踐が困難となつて來たので、組織化による統制運動が企てられたが、それが素直な發達を遂げず、關係した指導者間に勢力爭ひのやうなものが起つたり、それ迄發達して來た登山を自由主義的だと言つて排擊して自己の勢力を伸張しようとする者が現はれたり、登山を一樣に軍の行軍化しようとしたりして、登山の本質から離れたものとなつたので、山岳界に徒らに不愉快な空氣を與へたのみで　大多數の山の文化人はそれに背を向けてしまつたのであつた。その間山の第一線の若人達は殆んど出征してしまつて總ゆる研究も中絶し、岳人は沈默のまゝ終戰を迎へたと言つてよいであらう。此處で注目に値する事は、多くの山岳人は、山の本質から逸脱したやうなもの、歪められたものには目もくれず節操を守り通したといふ事である。つまり

目次

○山岳文化の再建……一
○山村より……槇　有恒……三
○御殿場雜記……島田　巽……四
○岳人の春……板倉黎子……五
○八ヶ岳を知らぬ閣下の話……中屋健弐……六
○胎内川中流への通路……藤島　玄……七
○返らぬ事ども……八
……職災報告書……
○圖書紹介……一〇
○會員通信……一〇
林和夫・津田周二・水野祥太郎
○會務報告……一一
○會員消息……一一
○會員住所變更……一一
○定款拔萃……一二
○あとがき……一二

山岳界は戰爭中活動こそ出來なかつたが、戰爭のために歪められるやうなことがなく、いはゞ無疵で殘つたと言つてよい。その爲に岳界の再建はそれ自身としては比較的容易なものではないかと思はれる。つまり停止してゐたものが前進を開始すればよいのである。目標である山そのものはもとより元の儘の姿であつて、戰前と戰後といささかの違ひもないのである。

しかし、山そのものが戰前と何等變りがないといふところに大きな問題があると思ふ。山は、人間の世界でどうゆう變化が起ろうとも、一つの國が如何に榮へ、如何にして衰へやうとも、何のかゝはりもないのであつて、たゞ大自然の法則に從つて輪廻してゐるのみである。富士は日本國の榮へる爲に存在するのではなくて、我が國が榮へやうと衰へやうとそんな事には何の關聯もなく悠久に秀麗な姿で東海の天に立つてゐるのである。それは極めて當然のことであり、又自然を深く認識する上にそのやうに考へる事は必要なことであるにかゝはらず今迄はさうした表現や考へ方は許されなかつたのであつた。〃國破れて山河あり〃この著名な詩の一句は、最も端的に右に述べたやうな考を表現してゐるばかりでなく、現在の私共には誠に深き感慨なくして讀むことの出來ない一句である。芭蕉が「奥の細道」の中にこの詩を引用して、奥羽の地に藤原氏の遺跡を弔つた感懷をのべてゐるが、國内に於ける一族の興亡に涙した芭蕉の感傷など、現在の我が國の事情に比べれば生やさしいものと言ふことが出來やう。

然るに私共は戰爭中はこの、國破れて山河ありの一句を否定して來たのであつた。國破れて山河なし。さう考へるより外なかつた。そして國破れて山河あることをひたすら怖れたのであつた。然るに今やそれは現實となつて目前にあるのである。大きな苦惱なくして現代に生きることの出來ない所以である。我々は今國破れて山河のある悲しみを悲しむと共に、一國の盛衰などに何の關係もない大自然の流轉の相を誰に遠慮することもなく自由に思考し自由に表現出來る日の來たことをひそかに喜びとするものである。

右に述べたやうな事とは別に、故國の山河といふ感情的な山がある。これはたゞひたすらに懷しく溫き山である。私共は幸にもこの故國の山河を失はずに濟ませられた事は誠に幸であつたと言はねばならぬ。その懷しい故國の山河を慕つて、戰に敗れた失意の將兵達が今歸還しつゝある。この人達に本當に溫き心の山を與へることが出來るであらうか。その準備を整へることこそ岳界再建の第一歩であると思はれる。心のゆとりを失つた近頃の我が國の人達は、歸つて來る兵隊に慰めの言葉を贈ることすら出來なくなつてしまつたといふ。いやそれのみか英靈に頭を下げる人さへ少くなつたと言はれる。戰敗國の傷ましい姿の一つである。しかしせめて山岳界だけでもさうした事がないやう、溫い心をもつて迎へ、溫い心の山に、せめて數日でも憩つて貰へるやうな設備をしたいものと思ふ。切實に關係者の善處を希ふ次第である。

岳界の再建にあたり、國威といつたやうなものを全く失墜した我が國の現狀では、戰前からの目標であつたヒマヤラ其他への所謂遠征や探險の實行は一應御破算とならざるを得ないであらう。手ぐすねを引いて待つてゐた若い人々には全く氣の毒といふ外に言葉はない。それならば今後さうしたことは敗戰國民である私共には全く望みがないかといふと、決してさうは落膽することはないと思ふ。此處當分は元より駄目であらうけれ共餘り遠くない將來に於て、私共が眞に印度の民衆達と手を握ることが出來るやうになつた曉には、ヒマラヤ登山の實現は不可能でないと思はれる。それ迄は嘗々として怠りのない訓練と研究をつむことこそ若い人達に課せられた使命であると考へることによつて勇氣も湧くのではないかと思ふ。今迄の我々は、やゝもすれば知らず〳〵の間に、國威とか軍の威力とか、さうした空しいものに頼つて何時しか甘い考を持つたり、或は思ひ上つた點もなかつたとは言へないかも知れないが、これからはさうした據り所もなくなつて本當に地道にやつてゆけるのは反つてよい事だと思ふ。

當分の間は限られた國土に數多くの人間が住まねばならない。山も亦限られた所へ、より以上の大を迎へねばならぬことになるであらう。すると、必然的に山岳荒廢の問題も起つて來て、山岳の保護といふことが重要なことになつて來る。登山者が多くなると當然遭難問題も亦多く發生する可能性があつて、それの對策といふものが今度こそ眞劍に考慮され具體化されねばならないと思ふ。再建岳界を眞に强力なものに育て導く爲には、あらゆる點に眞摯な論議が進められべきであり、それには再建本誌上はよき無憑を提供するであらう。振つて活用せられん事を希望するものである。（塚本）

會告

本會評議員茨木猪之吉氏ハ昭和十九年秋神河内附近ニ農作、十月二日朝穗高澗澤小屋ヲ出發、穗高小屋ニ登リ白出谷ヲ下ツテ高山ニ友人ヲ訪ネル旨告ゲテ立チ去リテ以來、豫定ノ日來ルモ神河内ニ歸來セズ遭難ノ模樣ニ、地元ニテ蒲田川附近ヲ問ヒ合セタルモ何處ニモ立寄リ居ラズ山中ニテ遭難セルモノト推定セラル、ニ至レリ、コノ報ヲ聞キ、同氏ノ本會ニ對スル多年ノ盡力ニ鑑ミ、本會ハ田邊、交野、塚本ノ三幹事ヲ遭難推定地點ニ派遣シ、地元ト協力シテ捜索セシムルコトトセリ

然ル所鋭意捜索ノ効モナク何等ノ遺品モ發見サレズシテ全捜索隊ハ空シク引揚ゲルニ至レリ

斯クシテ昨夏ヲ迎ヘタルモ戰火ハゲシクシテ再捜索ノ余裕ナカリシ所、八月白出谷瀧場ニ遺品發見サル、未ダ遺骸ハ發見サレザルモ同氏ノ死ハ確實ト認メラル

謹ンデ氏ノ御冥福ヲ祈ルト共ニ捜索其他ニ盡力ノ各位ニ深甚ノ謝意ヲ表スルモノナリ

昭和二十一年三月

社團法人 日本山岳會

山村より

槇生

戰災のため閑らずも信州の山里に住むことになつた。淺間山々麓でちぐはぐな生活をしてゐるうちに夏も過ぎ秋には早々今の所に移りたいと考へてをつたのであつたが、十月に降つた豪雨のため途中の鐵道故障が甚しく十一月を迎へても復舊せず峠路に雪が來ぬ内にと月半に急にトラックに乘つて引越すことになつた。

強い北風が冬枯れの高原を吹き渡る好く晴れた日であつた。小諸の街を通り抜けて上田への野道を下る邊であつたらうか。石の多い坂道に沿ふた村は閑散として美しい。彼の信州特有な、軒の廣い屋根の綏かな家々が日の光を燦々と浴みてゐた。そして何處の家の庭にも葉の落ち盡した柿の木が二三本は必度あつて眞赤に熟れた實が鈴なりになつて、その赤が空の群青に眩ゆい對照をなしてゐた。道端には清冽な小川が躍つてゐる。斯んな平和な郷をトラックで砂塵を揚げながら通るのは如何にも野蕃な行爲だなど、思ひ乍ら見ると もなく遠方に眼をやれば一連の鋭い雪の山脈が凍付いたやうに西の空遙かに高く波打つてゐる。大町から態々迎へに來て呉れられた百瀬さんが、あれは鹿島槍だ、その隣が祖父だと敎へた。あゝその山々に近く住まふとして今走つてゐるのだ。安住の家を失つてからは轉々として移り歩いたのであつたが、今度は氣持の落付いて暮せる所に行けるのだといふ親しい感情がその雪の山を眺めてゐると湧々と湧いて來るのであつた。

此處は高瀬川が鹿島川を併せて將に松本平に出やうとする右岸の山鼻である。村の西は直ぐに松や落葉松の茂つた二千米程の急な山になつて其尾根を傳つて行けば餓鬼岳に續く譯である。松本平の西に急傾斜を以て面する山脈が南より北へと聳える。そして有明や松川の邊りには著しく均勢のとれた扇狀地形を押出して美しい裾を作つてゐる。

太古越後の海から駿河灣へと大きな地溝が通じてをつたとのことであるが西は日本アルプスの高い壁が聳立し東は全く違つた相貌の隆起山脈が相呼應するやうに矢張り南北に走つてゐる。此の地溝説の正否を私は知らないが此處に立つて南北を通觀するとき如何にも併行する山脈に挾まれた空が表日本から裏日本迄續いてゐるやうに思はれる。何時も此の北の空を限る遙りは薄墨色の雲に塗りつぶされて蓮華岳の尾根でもあらうか灰白色に厚いのが、くつきりと浮び出てゐる。これに變つて南の空は淺黄色の溫い光に被はれて八ヶ岳より赤石の一部迄が夕榮えして薔薇色に輝くのをよく見受ける。

十二月も中旬を過ぎると北西の季節風が顯著になり鹿島槍や祖父の尾根を越した雪雲が頭上に迄延びて來て濕度の低いさらさらした雪が降り積る。今迄の最低氣溫は零下十八度であつたが零下十度前後位が常通である。併し乾燥し切つてゐるので爽快であり殊に日向の居らかさは又格別である。雪の山と野に圍まれて、じつと陽を浴みてゐると高原の空氣は澄み切つて溫い。

村は二十戸餘り。高瀬川から引いて來た一本の小川に沿ふて點在してゐる。皆田を主な耕地とした農家である。時勢の波は此の小さな村にも寄せてはゐるが爐端の話題は矢張り、くらしゝが捕れたとか、今度何屋（同姓の多いせいか皆屋號にて呼ぶ）に嫁が來るとかいつた話が多い。都會人のやうな過度な感覺を自慢とも思はないし又必要ともしないのだ。それに本道から一里も傍へ外れた場所なので旅客などの來る譯も無く、毎日何處の家でも朝から夜迄變りなく藁を打つてゐる。親から子へ子から孫へと代は變つても冬には必ず藁を打つのであらう。そして世の中は今激しい轉變の嵐が吹き捲いてゐるといふに變りなく打つてゐる。

こんな人達の考へることや爲る事は地に付いてをり決して付け燒刃でないと思ふ。それでも此村に藁を餘り打たぬ人が一人ある。獵師の荒井さんだ。若い頃は山案内人をして立山溫泉を朝發つて午後の二時か三時には大町に着いてをつたといふ豪の者で、昨日も裏山の林の中で鐵砲を擔いで獲物を探してゐるのに出遭つた。

「何もゐねえじい」

と言ふ通り彈丸は一發も未だ使はぬらしく腕に卷いた許可證のみが目に立つてゐた。氣の好い人で獵などは忘れて私と長話をしたあげく飯でも食つて又田直さうかと歸つて行つた。

昨夜から激しく吹雪いて今日一日吹いた。だが夜になると何時の間にか風も治まり雪も止んで星さへ燦めき出した。何時にもなく子供等が集つて騒いでゐると思ふと誰れかゞ嫁々と呼ぶ。新雪に深々と被はれた田甫道を提燈が二つゆらめいて來る。村の端の道祖神の處迄來ると急に曲つて此方へ向つて來る。やがて鈴の音につれて馬橇に乘つた花嫁が提燈をかざした母親に抱へるやうにかばはれて高島田に結つた頭を大切に固くなつて座つてゐる。父親は裏の上に傘をかざして散りかゝる雪を防いでゐる。〝お日出度う〟と浴みせ懸けると、見でもあらうか手綱をとつた若者が元氣のよい聲で〝有難う御座んすう〟と答へた。私の家の角で橇は一きしりぎしつて道を北に曲り、やがて鈴の音も後についた子供達の騒ぐ聲も遠去かつて凍つた野面を鋭い風が颯々と過ぎて行つた。私は花嫁の一行を見送つて再び道端の小川から明日の用水を汲むのであつた。

明日も亦山々は晴れ輝くであらう。その山その峯を求めて飽くことも知らずさまよひ歩いた時があつた。何故かは知らないが壓へ切れない憧憬に追ひ立てられたのではなかつたらうか。何んな激しい吹雪にも堪へて山へ山へと向つた悦はそれは或は未來への憧憬では

なかつたか。山には自由な世界があつた。しかし今日此頃の欝陶しい心持は何うであらう。何うにもならんことに、くよくよしたとて何うならう。耻づかしいが彼の雪の山に向つた時のやうに強い明日への夢が湧いて來ない。祖父の尾根から雪煙があがつてゐる。夕陽に映えて焔のやうだ。美しい、しかも嚴しい山は斯う呼びかけてゐるやうだ。自分達の懷に入つて靜かに安らかなれと。

會報原稿募集

復刊早々の會報は眼界を廣くし多方面より原稿を求めます有益な原稿が多くなればそれだけ頁數を增して行きます。論文、隨筆元より結構ですが今の會報に欲しいものは特に紀行、研究、考證、會員通信等であります。

原稿紙はなるべく十五字詰のものをお使用下さい。

〆切は毎月二十日

宛先は當分のうち

東京　中目黑一ノ七四二

塚本繁松宛

に御願ひ致します。

御殿場雜記

島田巽

いよいよ一億總戰死とか一億總穴居とかすさまじい御題目が唱へられ始めてレイテ以來何度目かの天王山――本土決戰といふ名前だけは至極景氣のいゝ呼聲の盛んだつた昨年の初夏、疎開先の御殿場で私が最も好んだ二つの展望臺の内の一つである、秩父宮邸の背後に擴がる箱根驛街道に添つた草山に腰をおろしては折柄の岳麓の綠一色を樂しんだのであつた。籠坂峠から須山、十里木へと打續くあの裾野の綠は眺めれば眺める程千差萬別の階調を含んで居た。ことに浮雲の多い日なぞの明暗の美しさは例へようもなかつた。しかし萬一この美しい裾野が戰場になつたら……時折町で鳴らす警報を遠くに聞きながら意識の底にある不安が頭をもたげる。戰車隊があの濕氷地帶を突進し、空挺部隊が富士を目標にこの東麓に降下したらどうなる。一體この平和な自然、わが國土の内で最も美しいこの風景の中で戰爭をするなぞといふことが許さるべきことであらうかとさへ考へずには居られない時があつた。

こんな時富士はとりわけ美しいものに感じられたのは不思議である。その時も思つたことだが、本土決戰といふ云はば國民への死刑宣告を下されていささか感傷的になつて居るために自然への愛着が一入深まるのではないかなと今でも考へて見て居る。その故か否か御殿場生活二十一個月の間、同じ富士の姿ではあつたが、あれ程色々の想ひで眺めたことは今迄になかつた。詩人でない一市井人の私にはこの想ひを適確に表現する術を持たなかつたのが殘念なのだが私の疎開生活に富士が大きな心のよりどころとなつて居たのは事實であつた。

この富士が一時はひどく地元の人達に評判の惡いことがあつた。一昨年十二月三日のB29編隊來襲を皮切りにこのあまりにもはつきりした美しい目標は何時でも靈となく夜となく利用されたからだ。東京行は箱根山群の金時山の上空から籠坂峠、山中湖へと一直線に進んではキラリキラリと銀翼を光らして右旋回して行くし、東海方面行きは左旋回して愛鷹山の上空へ向ふといふわけで爆彈のお見舞は頂かぬにしろ有難くない通路になつて居たのである。

ある日汽車の中で地元の人達が「どうも厄介なお山で今更隠すわけにも行かねえでな」と話して居るのを聞いて笑つたことがある。

しかしこのお山にも今では御殿場口は二合近くまでジープが行くといふ話で、地元の所謂有志連はまた富士一周觀光ルートの協議に大童の樣樣である。今度はお山の方が「今更隠れるわけにも行かねえでな」と云ふようなことにならねばよいと思つて居る。

……◇……

御殿場に住んで富士を仰ぐのは三度々々七勺の飯を食べるのと同じように當り前の話であるが、この土地の風景に親しむに從つて美しいなと思ひ出したのは東に望む丹澤山塊と西南に望む愛鷹の姿であつた。須山の方へとすつきり伸びた富士の力强い斜線をはつしと受さめて立つ越前岳から南へ續く愛鷹の峯々は午後の逆光線に何時も美しいなと思はされるし、時たま雨あがりの直後なぞ、あの寢雜な稜線や溪にからむ雲霧によつてとてつもない巨塊を感じさせられるのであつた。

愛鷹に大害降れり百巢(もゝひだ)の
黄くろき森を降り埋みつゝ

この牧水の歌にある百巢の形容をそのまゝに現したこの山の姿に本當に驚かされたことが屢々あるのである。

丹澤の方はこれに較べると點景的な眺めではあるが、あの西面のガレに雪がつく時の眺めを私は樂しんで待つようになつた。岳麓の高原としての味ひが、丹澤のこの半身像を地平の上に望むことによつて一入增すように思はれた。愛鷹の水墨的な美しさに對して小さくはあるが御殿場高原から見た丹澤山塊は突拍子な形容ながらセガンチーニの作品の背景をなす遠山波のような洋畫的なものを感じさせられる。

戰時中の私は多くの友人達と同樣、ただ山を眺めることに僅かに慰めを得るだけで山に登る時間を持ち得なかつた。その山もこの樣に毎日同じ姿のものばかりであつた。しかしそれだけに都會生活者の我々には今迄になく親しいものを感じさせられたのであらう。

今度の戰爭では實に多くの人達が農村へ山村へと入り込んで生活を營んだのであるから、これらの人達の中には夫々の「心の山」を持つた人もあらうし、また今迄感じなかつた親しみを始めて丘や高原や山に對して抱いた人も多いであらう。

朝出立して晝食を山頂で濟し、夕方にはまた雜踏の都へ歸ると云つた戰前の所謂ハイキング全盛時代の馳足登山とは自ら異つた山野の味ひ方が普遍化したとすれば、これは戰爭が齎した數少いプラスの面の一つかも知れない。マイナス面ばかりの戰爭で、せめてこれ位の收穫がないことには、ただ徒らにルックザックばかりが徒らに大衆化しただけでは何ともあきらめようがないといふものだ。

もつともルックザックの使命發展は日本人の擔荷能力をすばらしく向上させたよと抗議されるならば我また何をか云はんやである。

……◇……

爆擊の燒んだつた頃、思ひがけない友人から「近頃に紀行文を探しては讀んで居るよ」といふ話を聞いた。その度毎にやつぱりそうなのかなといふ曖昧な嬉しさを感じたのであつた。切はつまつた明日の命を知れぬ折、身邊小說の下らなさには手も出ぬし、勿論言論統制下の御用出版物は眞平だし、書架を探しては、結局本當に人間そのものが描き出されて居る作品を漁らずには居られなかつた。滿員の汽車の中で讀みつづけたロマン・ロランのジャン・クリストフは私に飽くまで生き拔く力を敎へて與れた貴重なものだつたが、同時に私の愛讀の書ギド・レイの文章も最大の慰めだつた。紀行文と云ふと、いやに安つぽい語感であるが、大島氏の神津牧場や松方さんのアルプス記、或ひはフレッシュフイールドのイタリアン・アルプスなぞを休日の机上に置いて樂んだ氣持は、今にして思へば懷しい想ひ出であり、必しも單に逃避者の心境ではなく、もつと切實な內心の要求に出たものと私自身は考へて居る。

そんな風な氣持から終戰直前、黑田孝雄氏の「登山術」を讀み直しては、W・ヤングが「山登りの實際」について揭げた二つの事柄に私は改めて激しい感銘を覺えたのであつた。それはこゝに引用するまでもなく曾て會報紙上にも揭載されたので會員諸氏は御承知のことであらうと思ふが、ヤングは山登りの實際を制約する二つの事柄をあげ「一つは個人として動作する場合におけるわれわれの技能と經驗とであり、一つはパーティの合成された共同動作におけるわれわれの技能と經驗とである」と述べ、この第二の協同動作において最も重要なことは各人が當然に負ふべき義務を綿密に履行することだとして「この協同動作に對してかうした義務を要請するものはグッド・マナーとフエア・プレイとの二つの傳統である。グッド・マナーといふのはいがにして他のものの安全をはかり、山登りを愉快にたのしませ得るかを考慮することであり、フエア・プレイといふのは山岳に對して、山登りといふ傳統に對して、またわれわれのその時の成功に對して、畏敬とか尊重とかの念をもつて接することを强調することである」と記して居る。この一節を讀んだ時思はず私はハッとした。山登りの社會の規律と傳統がこれ程卒直に簡明に表現されて居ることに驚いたと同時にあまりにも日本の社會に缺けてゐる二つのもの――しかも最も社會の基本であるべきものがはつきり指摘されて居たからだつた。

つくづく私は山登りのよさといふことを考へざるを得なかつた。よい山登りの出來る國民はさりも直さず、よい社會を持ち得る國民なのであつた。戰時中の登山指導者たちが果してこの二つの傳統グッド・マナーとフエア・プレイを强調したかどうか私は知らない。だが恐らくこんな片假名なぞを標語に持出したら行軍登山家の痛擊を喰つたであらうことだけは確實だと考へる。それはさもかくこの二つの傳統の復興を眞劍に考へねばならぬ時だと以來私は私自身に云ひきかせて來たのである。

岳人の春

板倉黎子

戰爭中、大東京に三多摩地方を編入して都制が布かれた。生まれ落ちるとから二十數年住み馴れたこの土地が、高い山々や峠を持つ有數の都市になつたことを、充分承知してはゐるものゝ、この頃程「我々東京都民は山に惠まれてゐる」と感じたことも少ない。

屋根の燒け落ちたホームから、また朝の滿員電車のガラスのない窓から、高壓線の鐵塔や、瓦を載せたばかりの眞新しい小屋を前景として、第一に雪白な富士と、秩父の山々や相模連山の起伏が殆んど目を遮ぎるものもなく眺められる。電車から吐き出される人の波その人々の足元を見てゐると、疎開によつて厄を免れたらしい登山靴、スキー靴がかなり目立つて來た。今は露店の續いた埃つぽいアスファルトの一や、殺風景なビルの階段をカツカツと重苦しい音を立てゝ踏んでゐても、――半歲も前には凡そ考へられもしなかつたことなのであつたが――やがては一ノ倉の岩場を攀ぢ、或は粉雪の深々と積もつたタンネの林間を雪煙立てゝ走る日もあらう。もう全く無意味な呪はしい戰は悲しむべき結果をもつて終了した。二度と再び「職拔スキー」「行軍登山」「何々錬成」等の文字に惱まされることもないであらう。今から思ふと直接戰鬪に關係のない私共女性の山行は、まるで罪惡視されてゐたやうで甚だ肩身の狹い思ひをしたものである。

一昨年の秋、紅葉に彩られた奥鬼怒の山旅を思ひ立つた時のことである。陸測五萬分の一の地圖數葉をもとめるために、代書屋に足を運んで「地圖購入許可申請書」を書いて貰ひ、履歷書を添へて警察の特高課を訪れた。そして「配偶者は?」とか「日頃どんな書物を讀んでゐるか?」とか「改造中央公論を讀んだ事があるか?」とか根掘り葉掘り訊問された擧句「四五日してから來てみるやうに……」と體よく追ひ歸されてしまつた。又岩原のスキー・ハウスの前や展望のひらけた場所には必ず「俯瞰撮影を禁ず」のいかめしい禁札が立つてゐた。それらのことは總て無駄な勞苦でしかなかつたのに……。

さしあたりは敗戰に續く心の痛手や、食糧事情、モラトリアム、交通制限等々によつて山行も亦思ふに任せぬことであらうが、今はもう全く何の束縛も、干涉も、壓

迫も感じずに各自思ひ々々に、この稀に見る美しい祖國の山や溪に抱かれ、心ゆくまゝに大自然と語らふことも出來るのである。

また憶ふ。雪に閉ざされた冬の永い山村の人々にとつて、今年ほど陰鬱なるべき冬が心樂しく、短く感ぜられたことは且てなかつたであらう。まだ蟄居の冬の生活がやつと半ばを過ぎたばかりであるが、爐端で藁仕事をしてゐる人々や炬燵で繕ひ物にせはしい女達は宛も溪に谺する雪崩の豪快な響を耳にしてゐるやうな氣持がしてゐるであらうし、こぼ屋根の雪から溜り落ちる雫の規則正しい音を軒端に聽く時のやうな感に撲たれるであらう。

終戰後最初の紀元節の午前、私は久しぶりで西多摩の丘陵地帶を歩いてみた。縣道の兩側の畑の麥はまだ短いけれども、生々として青さが眼に滲むやうである。松の疎林を抜けて緩やかな徑を登つて行くと、日陰の黑土がぱくりと口を開けた間から、長い霜柱が銀色の輝く牙をむき出してゐた。數日前に降り積んだ雪が、谷間や木影に消え殘つてゐたが、梢を渡る風の音にも、林のあちこちで囀き交してゐる山雀の聲にも流石に長閑な春の息吹が感じられた。地圖には七間峠と出てゐるが土地では七國峠と呼び馴らされてゐるだけあつて、甲武相の山々が遠く近く重なり合ひ、朝な朝な燒跡の彼方に眺められる御嶽とその一群の山塊とがすぐ眼の前にあつた。飛行機が秋川の溪谷の上空と思はれる邊りを、稍低くゆつくりと旋回してゐたが、もうそれは全く平和な眺めであつた。松の大樹の荒くれた瘤は、淡黃色の樹脂を流してゐた。それを細い枯枝の先につけて甜めると蜜のやうに甘い。行手の高みや木立に人聲がする。彼等は薪を新るに忙しいのである。山道では堆肥にする落葉を高々と積んだ牛車に出遇つた。その黑い牛の腹の毛は朝の陽光に燦々と輝いて見えた。徑が下りにかゝつてから右手の小山の裾に、一塊の茅葺屋根や土藏を交へた部落が見えて來た。そしてやがて岩藏鑛泉へ通ずる平坦な道に出た。斬り出されたばかりの薪の束が數丁に亘つて道路の兩側に積まれてある。そこに漂ふ新しい木の香が道行く人の鼻腔を擽る。雜木山の土手腹に何十メートルおきにか規則正しく掘られた軍用壕道が空虛に口を開けてゐる。もう春なのだ。春が來てゐるのだ。（昭和二一・二・一八）

八ケ岳を知らぬ閣下の話

中屋健弍

二年五ケ月の軍服生活の中、八ケ月ばかりは東部軍司令部の防空作戰室の情報將校をやつたが、これは軍隊生活の中では一番面白かつた。

「敵ハ八ケ岳東方ヲ北進シツヽアリ」

「敵ハ赤城山附近ヲ旋回シツヽアリ」

「敵主二九大編隊ハ赤石山脈ニ沿ヒ南進中ナリ」

といつたラジオ放送はつまりこのときの僕の仕事だつたのである。大體、敵の飛行機が南方の基地からやつて來て、本土各地を爆擊して行くのに、敵機の行動を逐一ラジオを通じて國民に知らしめることそれ自身が頑迷なる軍部が所謂作戰上喜ばないところであつたのだ、新聞記者出身の情報將校が、がみがみ强硬に意見具申し、やつと實現せしめた譯であつた。ところが不完全な電探と肉眼監視哨しか持たない防空陣では、なか〳〵正確に行かず、それに加ふるに參謀連の頭の惡いのが、一々頭をひねつてつまらんことまで文章を直すので、一般には極めて不許だつたのも無理からぬことであつた。始めの中は地名を明示することすら許されず「關東北部とか」「京濱西南部」とか、全く漠然とした地名を使つてゐたので、何が何だか判らないといふ譯、東部軍の防空情報放送は不親切といふのが定評だつた。

そこで參謀どもの機嫌をそこねず、もつと判り易くする方法として考へたのが、山の名、湖の名を使ふことで、これは割合に許判が良かつた。殊に山岳地帶には監視哨が尠い關係もあつて、仲々敵機の行動を明瞭にすることは困難なのだが、山は比較的大きく場所をとつてゐるから、山の名さへ言へば、先づ間違ひは尠いといふことが、この迷案のみそであつた。山の名でも筑波山とか、赤城山とか淺間山とか、富士山は知らない方がどうかしてゐるが、八ケ岳はどうも判らないといふ「間抜け」が居つて、僕は或る日軍司令官に呼はれて、八ケ岳はやめろ、といふ御注意を受けた。僕は大いに憤慨して「八ケ岳を知らない者は低能ですよ」と返答したところ、司令官閣下曰く「わしも知らんよ、それぢやわしも低能か、」と來た。これは困つたことになつたと思つたが、そこで一席八ケ岳といふ山はこういふ山で、何處から登るといふことまで說明したところ閣下曰く「ふふん、そんなデカイ山かれ」と感心して居つた。

馬鹿馬鹿しいとは思つたが、上官の命令は　陛下の命令といふ軍隊のことだ。八ケ岳の附近は、長野縣でも「長野北部」とも「長野南部」とも言へない。一體なんと言つたらいゝですか、と反問したところ、「甲府北方八ケ岳」ではどうか、といふ話。「いやそれはいけません。甲府は山梨縣で八ケ岳は長野縣ですからまづいでせう」といつた具合で、遂に八ケ岳はよろしいといふことになつたのである。何しろこういふ山の名を知らぬ手合との問答は苦手だが、軍人の山を知らぬのには改めて驚いた次第である。

まあ、僕にして見れば、八ケ岳のような山を知らない司令官閣下や參謀殿たちでは、どうせ外のことも大したことは知らん譯だからとてもこの戰爭には勝てまいと感

じたのである。敗戰になつて暇で困る舊職業軍人達はこの際、暇にまかせて山の寫眞でも眺めたり地圖でもひろげて、山の勉强でもして貰つたらどうかと思つてゐる。

由のよさを知らない連中に、いくら說明しても無駄なんだから、せめてわれわれの邪慳だけは、やめて貰ふことにしなければならんと、ときどき思つてゐる。

飯豐連峰

胎內川中流への通路

藤島　玄

越後山脈の盟主飯豐連峰を繞る數多い溪谷中にも最後迄處女谷として取殘されたのは、巖の胎內を潛つて流れると傳へられた胎內川であつた。その原因は必ずしも渦登の困難ばかりでなく、源流地帶の山々の標高が主脈の二千米臺を著しく割る一六四二米の二ツ峰を最高として、大支流の賴母木川の源流門內岳にすら遙かに及ばず大石川の杁差嶽に僅に勝るに過ぎず併も直接主脈へ突き上げてゐない事に興味を失ひ、加へるに地元の宮久、熱田坂、夏井等の部落が灌漑用水に惠まれ農地面積が多く山奥へ進出する必要が比較的稀薄であり、行く場合は鳳倉山を隔て本流と並流する鹿ノ又川林道を利用し、嶮岨な本流を避けてゐる等が特異な點として考察される。

併し乍ら流域の長大にして、名立る積雪地域で水量は豐富、花崗岩地帶を流れる清冽さ、南北に貫流する爲の廣濶明朗、山毛欅の大森林の幽邃なる、更には一驚に價する岩魚の群游等を特記して、飯豐の溪谷中唯一の溪谷美を滿喫すると共に、源流地域や賴母木川溯登の良き據點として提供したい。

胎內川を源流から賴母木川合流點迄を上流とし、鹿ノ俣川落合迄を中流、以下蒲原平野を橫斷して日本海へ注ぐを下流とするのが妥當でゐらう。私の推賞する處の中流は、上流と中流の接觸する賴母木川から高倉澤（高倉山九七五米より西下）の間約二十町ばかりを差すのである。澄み切つた青綠色の滑らかな流れは輝く光を織り混ぜて銀白色の礫の小石を洗ひ、その周圍を圍繞する山毛欅の森林は雪崩や暴風の傷痕もなく鬱蒼と繁り、廣濶な空に聳立つ峰々にもその頂近い山壁に小さい雪溪を光らせる、よしそれが飯豐主脈から遠い前山にせよ。水邊を蹤ふて朝まだきに訪れる羚羊や熊の足跡は、礫の小砂や濕地の叢に珍らしくもなく發見され、澤々には青黑い岩魚が群游して羽蟲一匹でも見逃すまいと貪婪な眼を光らせる。春には山菜採りの村民が二三連立つてどつしりと紫蕨を擔いで歸る姿、夏には蛇の攻擊を物ともせず激流懸崖を釣竿片手に岩魚を追廻し夜は夜蚊を叩き乍ら盛んな焚火に尺餘の大物を處理する影を稀に見られるであらう。秋更けて舞茸採りが編籠肩に出た後の小屋を覗く時甘い香の舞茸が足の踏場もなく堆く殘されてあるのを見るだらう。

この壓倒の自然境も遭難飛行機捜索隊の集結を最高として、今は登山者、村民の訪れも極めて尠く、徒らな四季の變轉を繰返してゐるに過ぎないであらう。

◆一、鹿ノ俣川夏越戸越え◆

羽越線中條驛より約三里にして最奥の部落宮久に至る。途中の夏井、熱田坂も胎內入りの良き情報と協力を惜しまない。學徒達の渦登成功の鍵も此處を起點として本筋を辿んで行つだに外ならない。鹿ノ俣川沿ひに村より坦道二時間にして山神祠につく。それより踏跡程度となるが、獨木橋も朽ちて落ち盡し渡渉の連續となる。本流との分水嶺である鳳倉山は五月十日に近郷の信者は大擧して熊野權現登拜に往復する。踏跡も鮮で難しくなつたら澤通し溯行した方が面倒ない。一ケ所左岸の棚を橫搦みして通過する。約三時間半にて地圖の破線路の終點に着く。夏越戸の取付きが判り難いが能目に注意して小澤に入る。間もなく一枚岩の下から潛流した澤水が湧出る場所に行當る。右手の藪に埋れてはゐるが明瞭な踏跡を傳つて、七四九米と八三〇米の峰の鞍部天狗ノ休場へ直登する。峠に出て初めて二ツ峰から杁差嶽や西に間近い二王子岳の展望が許される。峰通しに行かず胎內側の斜面を橫切つて尾根に移ると猛烈な急降下で折掛澤へ出る。右岸の小屋跡より段丘の山毛欅の森林の捜索隊の作つた古小屋が、澤沿ひに僅先の胎內本流の磧に天幕を張るがよい。鹿ノ俣から胎內へ橫斷に約四時間を要し、村から一日行程である。昭和九年七月初、此の渡場を渡渉し四十年來の大豪雨を冒しつつ賴母木川を溯行して地紙山に出て十一日目に川入へ出た思ひ出が深い。

◆二、西俣川高倉山越え◆

羽越線坂町驛で來坂線乘替、越後下關驛より約二里にして大石に至る。途中久保には胎內方面に精通する橫山柳作がある。大石、金俣の人達は西俣川を大熊澤（杁差嶽の西の等高數字尾根の北の澤）先きまで詰めるが、高倉山を北側ら越して胎內入りを試みないが併し岩魚には充分の魅力を感じてゐる。村より西俣川沿ひに約四時間にして八六〇米峰東直下の杁差鑛山跡の林道終點に至る。徑は是より藪で難渋を極めるが、川沿ひに水平に搦んで大熊の越場迄一時間。大熊澤渓合附近も山毛欅の大森林で澤近くに熊狩小屋がある。大熊澤を渉つて本流の悪場の上を辿つて以後は全部川身を溯行し、右岸の鉾立澤を過ぎ朴ノ木澤に至ると、南は折目ノ澤、西は蟹谷澤と、三俣になる。約一時間半。鱒谷の小澤を途中の瀧を高巻きして高倉山北鞍部に突き上げるに更に一時間半。眼前の杁差、鉾立から主稜の北股岳の大觀は樂しい。高倉山から五葉や山毛欅の巨木を縫つて、胎內への等高數字の尾根を八〇〇米迄辿り、南尾根の低へ方へ移つて、胎の字の下へ注ぐ高倉

澤落合へと下藪を漕ぎ約二時間を費す。村より矢張り一日行程である。昭和十九年八月通過して源二の隱し徑の鉈目には恐れ入つた。

◆三、二王子岳越え堂澤入り◆

羽越線新發田驛より田貝へ約三里。近一里先きの二王子神社にも宿泊出來るが無人である。この通路は六月初旬迄の殘雪期を利用して胎内水源地域を馳け巡ぐるに最も適してゐる。田貝に案内人夫を得る事は絶望に近いが、昭和十三年六月初に相當の荷を持つて二王子神社から胎内往復の後、新發田驛へ出て日暮であつた記錄を考へると一四二一米の二王子岳越えも案外快適なものがある。神社より半ば雪を踏んで約三時間にて頂上に達し、大日嶽、飯豐本山、北胎岳と飯豐連峰の全容を一眸に納め得るのは無二の收獲であらう。

二王子岳頂上から奥ノ院の東斜面の大雪溪が堂澤（檜ノ木澤）で二本木山（一四二四米）の唐澤と（作四郎澤）難易の對照をなしてゐる。堂澤は土澤、唐澤は岩澤の意味である。頂上直下九〇〇米邊に大溪があるから奥ノ院の南嶺りに降路を求めるがよい。五五〇米邊より雪溪は斷續するが大した惡場もなく約二時間前後にて新綠を馨らす胎内川に達するを得る。

もごも事ぬらぬ返

…書告報災戰…

一、本會事務所圖書室の燒失

虎ノ門不二屋ビル内にあつた本會事務所は昭和二十年五月二十五日夜の大空襲で全燒し、一物も餘さず灰燼に歸してしまつた。眞に殘念の極みであるが、冷嚴な事實である。多年にわたつて集められた數千卷の貴重な圖書も、事務用品や帳簿も、百五十噸に近い優秀な用紙も一切跡形もなくなつてしまつたのである。不覺乍らこんな無慘な燒け方をしようとは想像もしなかつたのだつた。四月にビルの周圍の木造家屋が强制疎開された時は、これで先づ燒夷彈攻擊には大丈夫と一安心したのであつたがそれは大なる認識不足であつたのである。二十六日の朝、日黑、白金、三田、飯倉とその夜の燒跡を縫つて虎ノ門近くへ達した時は附近はすつかり燒け落ちたが、不二屋ビルはきれいに殘つて居り、本會の事務所はガラス窓もきちんと締つてゐたので、さては助かつたかと飛び上る程嬉しかつたが、前へ廻つて見るとビルの前面は無殘にも黑焦げとなつてガラスも一枚殘らず燒け落ちてしまつて居り入口の階段には眞黑な屍體が轉つてゐる仕末に、駄目だつたのかと落膽しながらも、裏側から見た樣子では事務所はまる燒してゐるものとは思はれなかつたが、中はまだ餘炎が熱くて入る事など思ひもよらず、再び裏へ廻つて見たり、隣のビルから屋上へ上つて見たりしたが結局どうする事も出來なかつた。事務所の窓のすき間から折々ふーつと煙が出てくるが、下から見上げた樣子ではまだ相當に燒け殘つてゐるやうにも見えたので何とかホースの一本も入れて見たいとじれては見たが、水道の水壓は全くなくなつて居りポンプも一臺もない狀態だつた。それに近くの大東亞省が尙紅蓮の炎をあげて盛に燃えてゐるのに全く放置されてゐるのを見ては最早やあきらめるより外なかつた。かくて本會所藏の洋紙が全く燒け切つて餘熱のさめる迄には半月餘もかゝつたのであつた。當夜は强風であつたとはいへ何故に鐵筋コンクリート造五階建の不二屋ビルはかくも無慘に敗れたか、其夜現場に居合せなかつた私としては眞實を知る由もないが、矢張り現場に居合せなかつたのではあるが、ビル主人の話によれば、當夜近所居住の避難者達が不二屋ビルは大丈夫と多數の家財道具を持込んでゐた所へ猛火が流れこんだ爲との事である。このビルでは蠟山政道氏の東京政治經濟研究所の萬卷の藏書も亦烏有に歸したのであつた。

一、木暮會長記念文庫の燒失

本會圖書室の燒失によつて、木暮會長記念文庫も亦一切灰燼に歸してしまつた事は殘念の極みであつた。同文庫は十九年十月に木暮家が信州へ疎開されるに當つて、是非引取つてくれるやうにとの事に、受納したものであるが、本會所藏のの重要圖書さへ疎開出來てゐないのに、此處に又貴重な文庫を受入れることは甚だ苦しいことで、希くば他の疎開荷物と共に疎開していたゞきたかつたのであつたが、引越荷物が多過ぎてさうもならず、引取つて二ケの大箱詰とし、何時でも疎開出來るやうな態勢に置いたのであつたが、遂に動かすことが出來ず、會員諸氏に未披露のまゝ一塊の灰としてしまつた事は、返すゞゝも殘念であつた。今更返らぬ事乍ら近く本誌上に同文庫目次を發表して謝意を表すると共に、圖書室再建の參考にする豫定である。

一、「山岳」第三十七年第二號の燒失

とつくに會員諸氏の手許にあるべくして、それが何時迄も印刷所から出て來なかつた「山岳」第三十七年第二號は遂に印刷所内で完全に燒けてしまつた。しかもそれが判明したのは左程遠いことではなかつたのである。

病身の木暮會長をせき立てて、漸く原稿を仕上げていたゞき、揃つた原稿を割付けして印刷所へ渡したのは十九年の暮なほ寒い頃であつた。所で寫眞版や凸版は外の印刷所で作つて、出來上つたものを活版の印刷所へ渡すことになつてゐたのであつた。その中に本文の一部に組込む凸版圖がかなり多くあつたので、それを見た活版印刷員は凸版が出來て大きさがはつきり判らないことには活字を組むことは出來ないと言ふのである。これは大した難題だつた。素人の計つた寸法は信用出來ないといふのだが、當方としては間違ひのないやうに入念に計つて割付してあるのだから、是非凸版の出來る前に組版してもらひたいと賴み込んだので、それでは組みませうと引受けてはくれたものの實は單なる口受合に過ぎなかつたのである。七月に凸版、寫眞版が出來上つて引渡し八月にはそれの代金五百餘圓の支拂が既に濟んだのにまだ活字の組版が出來ない狀態だつた。

毎月少なく共一回は催促に行くが少ししつこく催促すると「さては、非常時局を御存じないと見える」と應酬されるので二の句がつげないのである。かくて初校の出始めたのは十月の上旬であつたらうか。その校正は中々骨の折れるものだつたが、四邊さんにもお願ひして初校は十分の自信をもつて終つた。印刷所へ引渡して再校を待つた。所が此處に又一つ問題があつた。夫は日本出版會の一年間の出版許可期限が既に切れてゐる爲に再許可を要する事であつた。それで出版會へ提出する爲再校は二通刷るやう印刷所へ頼んで置いたのであつた。その印刷工場といふのは濱松市にあつたのである。

再校の出來を待つてゐると、十二月七日に突如東海の大地震が起つた。濱松の被害は甚大の樣子である。「山岳」はどうなつたか、東京支店へ中々詳報が入つて來ない。漸く樣子が判つたところによると、「山岳」の組版は大丈夫らしいが、何しろ工場は上を下へとごつた返してゐるから、逐次片端から整理をして行くと、その終るのが一月末にならうとの話、一應安心はしたものゝ、この樣子では果して無事に製本されて會員諸氏の手に渡るものかどうか漸く危まれるやうになつた。二月には再校刷も出來て來たので、一通を出版會へ差出して再審査といふ譯である。その間に再校を了り、責任校了を印刷所に依頼して出版會の返事を待つてゐると、やつと一部訂正の上許可となつた。しかし出版會側の希望通り訂正したりすると組版に狂ひが生ずるので、狂ひの生じない程度で訂正して勘辨してもらう事にした。そして一册總ページ二百七十頁程のもの二千二百部分の用紙金壬五十斤と四十斤を數十噸發送しやうとした途端に三月十日夜の下町の大空襲があつて輸送がぴたりと止まりどうする事も出來なくなつてしまつた。この時から輸送だけでなく、一切のものが動きがとれなくなつたので、只あれよ／＼といつて見守るより外になくなつた。かくして四月十三日夜には東京支店に保管の刷り上つた寫眞版が、先づ燒けて行つた。四月には濱松工場に爆彈のお見舞があつて、本社屋が破壞したが工場が無事だつたとの情報を得た。そして工場を疎開のため目下準備中との報を最後に衞後聯絡がたへてしまつた。五月二十四日塚本宅に保管中の初校が、二十五日夜には事務所にあつた再校一通と原稿が灰燼となつてしまつた。しかし當時としては原稿や校正刷の燒けた事をさまで氣にしなかつたのは、まだ校正刷一通と組版とが印刷所にあつたからである。印刷所では紙型にする相談もあつたから或はもう出來てゐるかも知れないとも思つてゐた。六月二十日の役員會では紙型に取つて置く事に決つたのであつたが、實際はその前日の十九日夜に一切が灰となつてしまつてゐたのであつた。しかし當時はどうにも聯絡が取れなかつたので、隨分おそく迄その事實を知らず、或はひよつとすると何處かに助かつてゐるのかも知れないといふ儚い望みを捨てないでゐたのだつた。連絡の取れなかつたのも道理で、その夜社長は燒死し支配人も亦其後重傷を負つて長く入院してゐたとの事で、事實上印刷所は全滅してゐたのであつた。斯くして「山岳」第三十七年二號は空しくなつてしまつたのである。只今再刊の準備を進めてゐるのであるが、今は既に亡い木暮前會長の絶筆など再び見る術のないのは無念言ふべき言葉もない次第である。尙同號の内容は會報第百三十號に發表の通りであつた。

一、會報第百三十三、百三十四號の燒失

會報一三一、一三二號が同時に發送されたのは十九年十一月初旬で、其頃次の一三三、一三四號が準備中であつた。しかし十二月七日の大地震で一時新しい引受がとまつたので、その解除されるのを空しく待つてゐたのであつたが、二月もおそくなつて、もうよるしいとの事に原稿を引渡すと、どうした譯か、其後無斷で返送して來た。後で理由を聞くと、濱松で印刷しても東京へ送る方法がないから斷つたとの事なので、それでは會員への發送を濱松へ出張してするから印刷してもらへないかと頼むと、相談して置くからとあつたのみで返事のないうちに東京支店が燒けてしまひ、其後連絡が出來なくなつた。そして五月廿五日夜事務所で全部原稿を燒いてしまつたのであるが、控もないのでどうゆう原稿があつたか今では一切忘れて終つた事は執筆者諸氏に申譯なく存ずる次第である。又同原稿が燒けた爲に會務報告の出來なくなつたものも相當出來て困つてゐるのである。尙百三十三號は田邊さんが、百三十四號は私が編輯した。（塚本）

事務所の現狀と會員各位へお願ひ

右に述べて參りましたやうに、昨年五月本會事務所が燒けてしまひましたので、取敢へず一時假事務所を鳥山理事方に置き、主なる事務は塚本主事が自宅の燒跡に天幕を張つて其處で執つてゐたのでありました。

それが急に悲慘なる終戦となつて一時混沌たる狀態となつてしまひましたが、いよ／＼會の事業を復活することになつてさて事務所を探しにかゝつて見ますと、ちきに見當りさうで中々さうは行かずあてにしてゐたのが逐々駄目になつたり、進駐軍の接收等で段々ビルの貸室も窮屈になるにつれ、一室の權利金が何萬圓といはれたりして、最近では事務所の設置は甚だ望みうすとなつて參りました。書庫の安全の爲には鐵筋コンクリート造りに限るのでありますが、今ではそれさへ言つてゐる餘裕はなくなつて來ました。何しろ塚本主事の自宅も未だに見當らんので今尙天幕の中で事務を執つてゐる關係上能率が上らず、追々仕事が忙しくなつて參りますと到底それではやつて行けませんので、何處でもよい、一日も早く事務所を設置するのが急務となつて參りました。つきましては各位の御援助をいたゞきたく切望する次第でありますが、お心當りのある方は左記迄、又はお知合ひの役員迄御一報賜り度お願ひ致します。

目黒區中目黒一ノ七四二

塚本繁松

圖書紹介

登山とスキー第八號

…飯豊連峰特輯…

新潟鐵工所登山とスキー部部報

昭和二十年の春淺い頃だつたと思ふ。編輯者の藤島玄さんからお便りがあつて、近く部報の〝飯豊連峰特輯〟號を出すものであつた。その頃は、敵の空襲も漸く劇しくなつて來た折だつたので、「大した元氣だなあ」と一人驚いてゐたのである。といふのは當時部報や會報を續けて發行してゐるやうな會がもはや殆んどなかつたからである。ところが事務所が燒ける迄とう〳〵雜誌が到着しなかつたので、流石の藤島氏も今度は出せなかつたのかなあと思つてゐた所、今度實物を見てそれが豫定通り昨年の四月末に發行されて居り、着かなかつたのは事故のせいと分つた。しかも頁列百餘ページにぎつしり詰つた大册（今時はこの位のものは大册に見えるのだからやむを得ない）だつたから二度びつくりした譯。內容は殆んど全部藤島氏自身の紀行集で、實際は氏の著した單行本と稱してよい。

記錄は昭和七年から十九年迄のもの九つも集められて居り、氏の住む越後方面からのものが多い。二王子岳より飯豐本山、秋の洗濯澤、北股岳越え、飯豐峽谷、天狗澤登攀、胎內川岩魚日記等興味深深たる記事が多い。私は實際は飯豐山には一度も登つたことのない全くのストレンジャーであるが、近頃「山岳」の原稿に二高の飯豐山あたりの記事が多いので、名稱などは細いところ迄知るやうになつてしまつた。殊に「山岳」第三十七年二號には「飯豐山の澤について」といふ飯豐の澤全體についての案內記が書かれ、この校正に骨を折つてから目も尙淺いので地名等についての記憶はまだはつきりしてゐる關係上一層興味深く讀むことが出來た。既に出て居るべくして戰災のために遂に燒けてしまつた「山岳」の身代りにこの雜誌が出たのではないかと思はれる程親しめる記事が多かつた。

末尾にある飯豐連峰文獻抄は同方面の研究家には見逃し得ないものであらうし、藤島氏の登山年表は二十數年にわたるこの山についての實地踏査の精密な目次とも言ふべく、山に捧げる熱情には敬服の外ない。非賣品だが、同好者には實費で頒つ由でまだ幾分の殘りがあるから希望者は下記宛申込まれたいと。（頒布郵稅共二圓、新潟市祝町四八八八　藤島　玄宛）

會員通信

◇

林　和夫

前略

小生宅は幸ひ無事で、元氣で過して居ります。昨年の會報に小さな警告を發した事が本當となつてしまひました。登山探檢を素朴な逞しい國民文化として發展させず單なる趣味と惰せしめた樣な所にも敗因の一端を見ます。しかし過去は過去。責任は吾々の一人一人の上にあります。目先の困難に負けず明るく立上るため殊に若い學生あたりに對し山を與へる事は大切と思ひます。山岳會が地味ながら積極的に立上るのは今だと思ひます。會員、幹部諸兄のお考へは如何なものでせうか、近況御一報下さい。

◇

津田周二

（前略）

先日の小生の手紙による會の目標に就いては實はまだ明瞭りしたものは持つて居りませんが、兎に角JACならではと言つた仕事をしたいものと考へた次第で、あまり他の登山團體がやつてゐる樣な事と同じ樣な事はしたくない（こんなことは言ふ迄もないのですが）それで一寸無理な仕事かも知れませんが左の二つの事業を考へました。

一、日本山岳案內（標題は考へるとして）

全國的に著名な山の綜合案內書の發行、地勢、地質、風土、積物、冬、夏のコース其他山に關する總ての綜合ガイドブック

著名な山と言つても出來るだけ地方的の中級山岳迄及ぼす

二、JAC山小舍の建設一二ヶ所に止めず小さく共纏りのある文化的設備を持つ山小屋を全國的に建設する

これも急速には不可能のことでせうが一年に一つ宛でも建てゝ行く樣な工合に持續的の事業にするその爲に、今から基金を準備し始める

說明不充分ですがあとは御推了を得たいと存じます。無理な仕事とは解つてゐますがJAC百年？の計畫の爲に御考慮を得たいと存じます。JACが山小屋一つ持つてゐないのは、何と言つても殘念です。

甚だ簡單な申上樣で恐縮ですが取敢へず、要點のみ御報申上げます。

◇

水野祥太郎

御無沙汰致し居ります。無事にどうやら生き永らへました。しかし罹災二回、勤先の造兵廠や途上でヒドイ目にあつたことは數回。身邊の多忙に何方へも御無沙汰に過ぎました。

現住所は姫路市手柄四七ノ三ですが、日曜のみより居りませんので通信は左に

大阪市福島區堂島濱三

大阪帝大病院整形外科教室

右へは講師として火木土に出て居ります。梅田からは徒步十分です。なほ金曜は傷痍軍人職業補導所へ義足を作りに行つて居ります近くそちらへ本職を移すかも知れません。山へ登れる義足（大腿切斷の）を作りたいと思ひますが到底及びさうにありません。なほ會報に何か書けとのことですが現在とてもそちらに頭を向ける餘裕がありませんので失禮させて戴きます。足が脚についての漫談ならひき受けます。

◇

會務報告

役員總會

昭和二十年六月二十日午後二時於小島久太氏方開催

出席者　槇、鳥山、小島、武田、高野、中村、木村、田邊、織内、小野、塚本、中司

議長　槇會長

議題

一、事務所戰災善後策ニ關スル件

右ニツキ槇會長、塚本主事ヨリ説明陳謝ノ言葉アリ。一同ヤムヲ得ザルモノト認ム

假事務所ヲ鳥山理事宅ニ置クコトトス

一、本總會ヲ會員總會ニ代行ノ件

本年度通常總會開催不可能ニツキ本役員總會ヲ戰時特例ニヨリ會員通常總會ニ代行スルコトトシ昭和十九年度決算報告ヲ承認ス

一、本年度會費ハ請求セザルコトトス

一、本年度ハ或ハ事業遂行不能トナルヤモ知レズ、ソノ旨ヲ戰災報告トトモ會員ニ通知ノタメ事情ノ許ス限リ臨時會報發行ノコト

役員總會

昭和二十年十二月九日午後一時於藏前工業會館開催

田席者　鳥山、冠、中原、藤木、松方、藤島、中司、額田、木村、交野、山口、織内、田邊、垣内、關根、小野、塚本

委任　槇外全員

議長　鳥山理事

議題

一、新事態下ニ於ケル方針ニツイテ、特ニ方針ヲ立ツル要ナキモ、狀勢ノ許ス限リ速ヤカニ事務所ナ設ケ事業復活ノコト

一、槇會長辭任申出ニ關スル件

槇會長現在地方在住ニツキ十分ニ會務ヲ見難キ爲辭意ノ申出アリタルモ、其ノ要ナキモノト認ム

一、雪中設營法ハ額田氏ヲ煩ハシ成文トシテ發表ノコト

一、占領軍ト本會トノ連絡ニツキ關西支部ヨリ要請アリタルモ、急ヲ要セザルコト認メ、考慮シ置クコトトス

一、行軍山岳部會改組ニツキ援助方藤木氏ヨリ要請アリタルモ、本會ニハソノ餘力ナク、會員ハ個人トシテ援助スルコト差支ヘナキモノトス

常務役員會

昭和二十一年二月三日午後二時於松方三郎氏方開催

出席者　槇、西堀、鳥山、木村、交野、田邊、中司、額田、織内、關根、塚本

議長　槇會長

一、槇會長再度辭任申出ニ關スル件

右ニツキ會長ヨリ現在ノ立場ニツキ説明、是非辭任ヲ許サレタキ旨懇請アリ、事情ヤムヲ得ザルモノトシ承認ス、當分西堀副會長會ヲ代表ス

一、開會後懇談會ヲ開キ、松方氏ヨリ登山協會（舊行軍山岳部會）ノ會長ヲ引請ケタルコト、會ノ今後ノ方針等ニツキ説明諒解ヲ求メラル。懇談會ニハ他ニ磯野（計）島田巽、中屋、谷口、今井田氏出席セリ

會員消息

佐藤隆太郎氏　二十年初頭の頃臺灣を經てジャワに赴きたるも其後消息不明

田邊多聞氏　（釜山地方交通局長）朝鮮に於ける任務を終り二十年末歸還

福川篤四郎氏　運輸省鐵道總局總務局長を辭任

今井田研二郎氏　運輸省大臣官房企畫課長に轉任

松方三郎氏　共同通信社常務理事（チーフエディター）に新任

早川義郎氏　伊豆新島より無事復員

水原德尙氏　無事歸還

沼倉寛二郎氏　復員、勸先興銀富山支店へ

綱藏志朗氏　復員、勸先東寶劇團へ復歸

赤間義健氏　海軍より復員

土田新一氏　右同

國武一郎氏　復員

山川修一氏　復員、山形縣東南村

山地方專務所土木課に勤務

磯野三郎氏　石川縣松任農學校教諭に轉任

谷口現吉氏　復員

中司文夫氏　三井信託本店に轉任

交野武一氏　復員

藤島敏男氏　日本銀行文書局長に轉任

同　昨年末夫人を亡はる

中屋健弐氏　復員、勸務先共同通信社へ復歸

小野　庸氏　復員、石川眼科に勤務

小沼英文氏　歸農

齋藤直一氏　札幌訴訟院長に轉任

日高信六郎氏　歸國

ジョン・モリス氏　交換船で歸國したエヴエレスト・クライマーの同氏は、二月中旬再來朝。今回はBBC特派員として約六ケ月滞在の豫定。昔馴染の友人がどこへ行つたか住所が判らず困つてゐるとの話で、槇さんの消息などしきりに聞いてゐた。丸ノ内會館に滞留中（島田巽氏報）

由木隆定氏　埼玉縣より衆議員議員に立候補

社團法人日本山岳會定款（抜萃）

第三條 本會ハ山岳ニ關スル研究知識ノ普及並ニ健全ナル登山ノ指導奬勵ヲ爲シ會員相互ノ聯絡親睦ヲ圖ルト共ニ山岳及登山ヲ通ジテ國民ノ心身鍛錬並ニ自然愛護精神ノ昂揚ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ

一、機關雜誌「山岳」其ノ他圖書ノ刊行

二、登山ノ指導奬勵ニ必要ナル研究會、講演會、講習會等ノ開催

三、登山施設ノ改善促進其ノ他登山者ノ爲適切ナル事業

四、目的ヲ同ジクスル他ノ團體トノ聯絡

第六條 本會ハ通常會員、終身會員及名譽會員ヲ以テ之ヲ組織ス

一、通常會員ハ本會ノ趣旨ニ贊シ會費年額十圓ヲ納ムル者トス

二、終身會員ハ前號ニ準ジ一時金二百圓以上ヲ納メタル者又ハ入會後滿十年以上ヲ經過シタル通常會員ニシテ一時金百五十圓以上ヲ納メタル者トス

第七條 本會ノ會員タラントスル者ハ會員二名ノ紹介ヲ以テ入會ヲ申込ミ常務役員會ノ決議ニ依リ承認ヲ受クルコトヲ要ス團體ノ代表者タルノ資格ニ於テ入會セントスル者ハ入會申込ノ際其旨ヲ明記スベシ

入會承認ノ通知アリタルトキハ會費ニ入會金五圓ヲ添ヘ拂込ムモノトス

第十一條 會員ハ機關雜誌ノ配布ヲ受ケ、本會主催ノ諸會合又ハ諸事業ニ出席又ハ參加スルコトヲ得

第廿五條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

× × ×

告

本會事務所儀、昭和二十年五月二十五日夜戰災ニヨリ燒失致候爲左記ノ通リ事務取扱致居候尙本會資產ハ現金、預金信託ヲ除キ總テ燒失致候間御諒承被下度候

假事務所　藤澤市鵠沼六三四〇　鳥山方

通信連絡所　東京都目黑區中目黑一丁目七四二　塚本方

右謹告候也

社團法人　日本山岳會

會費御願

昭和二十一年度會費　十　圓

至急御送り下さい

送金方法は振替貯金で東京四八二九番　日本山岳會

（會の住所は書かぬ事）へ御願ひ致します

編輯後記

やつと會報の復刊號をお目にかけられる事になりました。大きな喜びを感じないでは居られませんしかし、まだ〳〵條件が揃つた譯ではありませんので、今後の難航が思ひやられます。本號は印刷の都合上無理に急ぎ編輯を致しましたので、內容の不備をお詫び致します。

本號印刷には會員藤島玄氏に一方ならぬ御世話になりました。本號は同氏の御陰で出來た樣なものです。記して謝意を表します。

（塚本）

通常總會開催御通知

日時　六月一日（土）午後二時

場所　藏前工業會館（新橋驛前）

議案

一、收支決算報告及豫算附議ノ件

一、任期滿了ノ理事、幹事、監事選任ノ件

一、其他

昭和二十一年四月

社團法人　日本山岳會

追而右ニ關シ當日御欠席ノ向ニテ御意見有之候ハバ前日迄ニ御申出相成度、御意見ナク欠席ノ向ハ乍勝手委任御出席トシテ御取扱申上候間御諒承被下度願上候

ルツク・ザツクをお作り致します

私儀左記に疎開して居りますが從前通りルツク・ザツクの仕立を致しますから何卒御用命下さい

先づ御所持の布地見本をお送り下さい。その折必ずその寸法をお知らせ下さい。それ等を拜見の上御注文を承ります

長野縣下伊那郡喬木村阿島上町一ノ六三八

片桐盛之助

昭和二十一年四月二十日發行

東京都目黑區中目黑一ノ七四三

編輯兼發行者　塚本繁松

藤澤市鵠沼六三四〇

發行所　社團法人日本山岳會

會員番號B二四二八號

新潟市西堀通三番町

印刷人　本田芳平

新潟市西堀通三番町

印刷所　昭和時報社

東京都神田區淡路町二ノ九

配給元　日本出版配給株式會社

¥1,00